

異文化における移住者の文化とその運用 —延辺朝鮮族の民族境界維持の視点から—

Traditional culture of immigrants and its expression in an
intercultural environment : from the perspective of Koreans in
Yanbian, China maintaining their ethnic boundary

李 勁松

Jinsong Li

青島理工大学外国語学院

目 次

はじめに

- I 先行研究と朝鮮族の文化特徴
 - II 公的場面で提示される延辺朝鮮族のイメージ
 - III 民族関係から見る延辺朝鮮族の自文化意識
 - IV 近年における民族文化・歴史の構築
- おわりに

キーワード 移住民、伝統文化、民族イメージ、民族境界線

はじめに

地域や国境を越える現象は古くからつづく。そして、移住先での適応方法も時代や地域によって異なるが、周囲の民族との関係を築く過程において地域の少数民族が短時間のうちに言語などにおいて多数派語への同化をおこすなど様々な社会文化現象が出現する場合も多い。少数民族文化への保持と尊重を政策とする中国社会においても少数民族の人が民族語や民族習慣を失うなど同様の現象はめずらしくない。このような現象において、民族文化を喪失しつつある移住者・少数派にとってはいかに自民族の文化を維持していくかということは常に模索すべき

課題である。社会学的観点から見ても民族文化の維持の条件の解明は大きなテーマとなっている。こういう観点から本稿では、中国朝鮮族（以下朝鮮族と略す）を一つの事例として民族文化を保持して来た原因を解明する。

これは中国少数民族を理解する上でも必要であると考えられる。

朝鮮族とは、1860年代以降朝鮮半島での生活難や日本の植民地政策によって朝鮮半島から中国へ移住してきた歴史を持つ民族集団で、2009年現在中国における朝鮮族人口は約192万人である。100年以上生活基盤を主に中国東北地域（吉林、遼寧、黒龍江の三省）においてきた彼らは、移住後清朝の官憲や漢族地主との関係のなかで、「満洲国」時代においては日本人と漢族との関係のなかで、また1949年中華人民共和国の成立後には中国の少数民族として生活してきた¹。すなわち、朝鮮族の人々は複雑な民族関係を経験し、建国後は漢族が圧倒的に多い異文化の中で生活してきたわけで、その適応過程において必然的に漢族との融和をはかり、言語や生活様式、価値観などさまざまな側面からみて変容が進んできたことは疑いのない事実である。しかし、そのような変容のなかでも朝鮮族は同化することなく、独立した文化を担ってきた民族集団として、自分たちの言語や生活習慣にこだわり、漢文化とは一線を画しながら自分たちの独自の伝統文化を守ってきた。

本稿では、中国国内においても民族文化がもっとも保持されている延辺朝鮮族を中心に、強大な漢文化を誇る中国において彼らがどのような文化要素をもって自分たちの民族意識を表徴し、そのような文化がどのように維持されてきたかを、民族関係、伝統文化の応用、民族歴史の構築という社会状況などから考察する²。さらに、近年における朝鮮族の朝鮮半島における伝統文化への復帰の傾向から、朝鮮族の新たな文化傾向についても考察する。

本稿において、「文化」という用語を朝鮮族の日常生活に密着した言語や衣食住、生活習慣および教育、芸術文化と言った広い概念として用いる。それは、これらの要素は朝鮮族にとって、漢族と自分たちを区分し、自分たちのアイデンティティを維持していく上で極めて重要な要素であり、十分な検討を要する問題だと思うからである。

-
- 1 朝鮮族の行政分布を見ると、全東北三省には民族自治州が一つ、自治県が一つのほか、48ヶ所の民族郷・鎮を構成している。その中で、吉林省の延辺朝鮮族自治州は、朝鮮族が最も密集している地域である。この地域は、1952年9月3日に延辺朝鮮族自治区と指定され、1955年12月に新しい憲法の規定により、延辺朝鮮族自治州に改名され、朝鮮族の政治、経済、文化、教育の中心地となった。
 - 2 延辺朝鮮族自治州には、朝鮮族の新聞・雑誌・ラジオ・テレビなど文化機関、民族学校が設立され、朝鮮族の文化が温存される環境が実現された。他方、1960年代から延辺への漢族の移住が続けられ、農村部の一部を除いて、ほぼ全域で朝鮮族と漢族が混在している状況である。2003年現在、朝鮮族人口は延辺自治州全人口の37.93%、漢族が約58%の占有率を占め、漢族が同州における最大の民族集団となっている。なお、1980年代以降の移住者には、政府側の人口統計に現れない自由移動者が多く含まれており、実質的には漢族人口の占有率はもっと高いものと見られる。また、延辺地域には朝鮮族以外にも、漢族、満族、回族、モンゴル族など12民族が居住しているものの、漢族が圧倒的に多く、しかもほかの少数民族は民族語などが失われ、漢化したため、朝鮮族から見れば漢族同様であると認識されている。

I 先行研究と朝鮮族の文化的特徴

朝鮮族のアイデンティティを論じる時、移民の歴史が100年以上あるにも関わらず、中国文化に同化することなく、自分たちの言語や生活習慣を維持してきたことはもっとも重要な側面である。

朝鮮はかつて「東夷」の一つと見なされ、歴代の中国王朝に朝貢を行ない、中国文化を多様に受容し、強い影響を受け続けてきた。そのようななかで、朝鮮民族は檀君による建国神話をよりどころにして、固有の言語や文字、家族制度や人生儀礼、衣服、食文化など民族独自の文化を生みだし、同一民族として共通の文化圏をもつことによって、漢文化への同化を免れた。このように朝鮮半島においてすでに独自の文化を形成した朝鮮族の人々は、中国へ移住してからも辺境地域で自分たちのコミュニティを形成し、親族・家族制度の厳守、さらにはハングルの使用や衣食住といった面での伝統的な文化要素も守り、中国文化と一線を画してきた。

他方、朝鮮族は長年韓国と断絶状態であったために、文化・価値観などさまざまな面で韓国人と大きな隔たりが見られる。このため朝鮮族の民族文化を論じる際には、朝鮮族文化と朝鮮半島文化との同一性よりも、次第にその内的多様性へと関心が向けられ、主に「変容」という視点から検討されるが、それによって朝鮮族独自の文化に関する議論が本格的に展開された。

1993年「延辺大学第一次中国朝鮮族文化學術討論会」の開幕式で、金炳民は「中国朝鮮族文化は100年以上の発展の歴史を持っている。100年間われわれ朝鮮族は自分の文化を形成・発展させながら自分たちの特色を鮮明にした」と述べている（金炳民：1994, p.3）。1996年の中共延辺朝鮮族自治州委員会第7回全体会議では「中国の特色の朝鮮族文化の建設に関して」というテーマで、「中国の特色の朝鮮族文化」に関する論議がなされた。そこでは、「中国朝鮮族文化とは朝鮮半島の文化とも異なり、国内のほかの民族の文化とも異なる文化として、中国という大環境の中で、濃い民族色と独特の地方色を持ちつつ中国特有の社会主義文化体系に属する朝鮮族の新しい文化である」と総じて定義している（金鐘国：2000, p.3～5）³。

すなわち、朝鮮半島時代に育まれた文化を母体にしなが、中国という異文化環境、異文化に属する人々との交流によって、朝鮮半島の文化とも異なる朝鮮族独自の文化であることが強調されている。

このような朝鮮族文化の独自性に関しては、言語や音楽・文学、生活習慣などさまざまな側面から検証された。例えば、言語を例に挙げれば朝鮮族が日常的に駆使する朝鮮語は、咸鏡道における朝鮮語をそのルーツにしながらも、漢語と朝鮮語の二重使用から生じた漢語からの借

3 黄有福は朝鮮族文化に対し、「解放前の朝鮮文化でも、現在の韓国・朝鮮文化でもない、中国漢族文化でもない新しい朝鮮族文化が創出された」（黄有福：2002, pp.100～102）とその独自性を強調する。また金慶一は「朝鮮族文化は、朝鮮半島との関係で一方的に帰属される関係ではなく、一つの独自の特徴を持つ文化集団として、対等的な関係である」（金慶一：2001, p.581）とし、中国に基盤をおいた朝鮮族文化の主体性を強調する。

用語彙が技術、物質文化、親族や社会組織にまで至ることから、「延辺朝鮮語」というべき言語として定義する研究がある（金鐘国：2000, pp.119～127）。文学、音楽、舞踊、美術においても、その表現の内容、手法も中国でのマルクス、毛沢東の思想の宣揚、社会主義思想が深く浸透し、中国という祖国に対する祖国意識、その中での自民族の発展・繁栄が主なテーマで、独特な朝鮮民族文学・芸術が形成されたことが検証されている（金鐘国：2000, pp.176～200）。

すなわち、延辺朝鮮族の文化に関して先行研究では漢族と同じ地域に住んでいる生活環境から、漢文化の影響を受け、朝鮮半島の伝統文化とは異なる中国朝鮮族独自に文化を築きあげたことがこれまで強調されてきた。本稿では、視点を変えて朝鮮族の人々がなぜ漢民族との長期的にわたる接触のなかで、「漢文化」に同化されることなく、自民族の文化を守ることが可能だったのか、自分たちのアイデンティティを表現するため、どのような「自分たちの文化」を提示してきたかを、漢族との関係のなかで民族的境界維持という側面から検討する。その際、朝鮮半島で形成された母国文化との連続性を解明することは一つのポイントになる。それは、母国文化から持ち込んだ生活様式に持続性があることが、「仲間内だけの緊密な相互作用をもたらし、集団間の境界を維持するための象徴として役立つというかぎりにおいて、とくに重要である」（青柳：1996, p.114）からである。

具体的には次の手順で考察していく。①公的な場面で提示される朝鮮族のイメージにはどのような文化要素が使われるのかを考察する。②日常生活の中で彼らが認識している自民族の文化とはどのようなもので、なぜ自民族文化を守ることが可能だったのかを、漢族との民族関係を軸にして検討していく。③近年における民族文化復興運動を朝鮮族の自文化の再認識と捉え、「伝統的な文化要素」が今日の伝統文化復興運動に与える影響と朝鮮族社会への意味を検討する。分析には、先行研究を踏まえながら、最新の文献や新聞、2003年から延辺で継続的に行われた現地調査を駆使しつつ、検討していく。

Ⅱ 公的場面で提示される延辺朝鮮族のイメージ

朝鮮族の民族文化に関する先行研究で示されたように、朝鮮族は中国社会に適応して行くと同時に、朝鮮族としての「自らの文化」を保持しつつ、中国への同化を避けてきた。

「自らの文化」は「国家とのかかわりにおける地域社会や民族、国際社会とのかかわりにおける国民、というように、より広い全体社会のなかで、自分たちならざる外部との関わりにおいて『われわれ』意識が覚醒される契機を見て取ることができる。その『われわれ』意識が、当の人々が共有するとおぼしき文化なり特定の文化要素なりを参照し、それに訴えかえることによって、積極的な規定を施されているのである」（森山：1996, p.81）すなわち、「自らの文化」の提示は、アイデンティティを維持するための一つの手段ともいえるが、それは、大村益大の

論文の言葉を援用すれば「自己イメージ」(大村:1998,p.160)を描く営みでもある。ここでは、中国社会に向けて発信される朝鮮族の文化的特徴を明らかにするために、公的な場で利用される朝鮮族生活に関する記述や写真やポスターから抽出し、そのようなイメージから読み解くことのできる文化要素を見ていく。

1984年に最初に発行された『延辺朝鮮族自治州概況』には、延辺朝鮮族の風俗習慣として、朝鮮半島での伝統的なスポーツや民族式家屋、伝統的な結婚式、還暦祝いの写真が載せられている。また、「延辺朝鮮族自治州設立記念日」や「延辺朝鮮族自治州民俗博覧会」など対外的に延辺朝鮮族を宣伝するイベントやポスターには鮮やかなチマ・チョゴリを身に纏って、農楽舞・チャンゴ踊りを披露する朝鮮族の姿など伝統的な文化要素がふんだんに用いられている。

図1、2、3、4は、延辺朝鮮族自治州40周年を記念して発行された『中国朝鮮族の民俗文化』に提示されたもので、これらの中に中国における朝鮮族の自分たちのイメージ作りに使われる文化的特徴をみることはさして困難ではない。これら図像の共通イメージから確認できるのは、すべての場面で朝鮮半島での伝統的家屋(図1を参照)や礼儀(図2を参照)、鶴が描かれた屏風(図3を参照)、クンサン(還暦や結婚式など儀礼で使われる儀礼用の供え物、図3を参照)、チマ・チョゴリ、民俗祭り(図4を参照)など朝鮮半島における伝統的な生活様式や慣習である。

勿論、これらの朝鮮族のイメージは朝鮮族のエリート層によって提示されたもので、このような写真や絵などは、展覧会、行事、さらには民族学校の音楽・舞踊教科書の表紙を飾るなど社会的なさまざまな場面で繰り返され、社会的に特異なインパクトを与えると同時に、中国社会全体に向けて朝鮮族固有の民族性を表わす文化的特徴として生産されつづける。例えば、延辺朝鮮族自治州博物館の「朝鮮族民俗遺物展示ホール」には、「朝鮮族の優秀な形象を世に広く知らせ、民族精神を高揚させる」ことを目的として、朝鮮族の伝統的な食文化、居住、体育、衣装を含め500件余りの絵や写真が展示されている」(延辺博物館パンフレットより)。



図1 朝鮮族の伝統的家屋

典拠:『中国朝鮮族の民俗文化』(1992)より。



図2 家庭での礼儀

典拠:『中国朝鮮族の民俗文化』(1992)より。



図3 還暦のお祝い

典拠：『中国朝鮮族の民俗文化』（1992）より．



図4 民俗ノリ

典拠：『中国朝鮮族の民俗文化』（1992）より．

以上の図像からも朝鮮半島における伝統文化の要素は、朝鮮族が中国国内のほかの民族と自分たちを区分するひとつの指標となっているといえる。民族衣装一つ取り上げてみても、延辺でのさまざまな行事で朝鮮族は民族の衣装で他民族と異なる文化的演出を見せる。民族衣装は社会的・シンボルの機能からいうと、「その衣服を着用する社会成員の社会のカテゴリーを指示する」（見田宗介他・栗原彬・田中義久編：1988, p.33）。つまり、「装いには、身分や年齢、それに未婚や既婚といった立場をあらわしたり、神話・伝説を絞り込んだりと、さまざまなメッセージが込められており」、「集団に固有の装いがはっきりしてくると、当然それは、言語や信仰などと同じように、いや視覚に訴える分もっとはっきりと、「われわれ」と「かれら」をわける基準になる」（21世紀研究会編：2000, p.245）。

すなわち、同じ地域に住みながらそれぞれ異なる民族衣装や伝統的な踊りを示すことによって、両者の間には文化的に太い境界線が引かれている。このような民族衣装による区別は、延辺朝鮮族の日常生活のなかでもはっきりしている。朝鮮族女性は結婚式や還暦などのイベントの時にはチマ・チョゴリを愛用しており、いかなる場合でも漢族の民族衣装であるチャイナドレスを着ることはまずない。明らかに、このような民族衣装は彼らが自分たちを他の民族と区分するひとつの大きな基準となっているのである。

朝鮮族は中国での適応・定着過程において、いわゆる「中国的特色の朝鮮族文化」を築きあげた。しかし、中国における朝鮮族のいわゆる「独自の文化」も朝鮮半島での伝統文化を核にして構築された文化である。またこれらの文化的要素が公的な場所で、頻繁に取り上げられることで、実際にはその文化が大きく変容しているにもかかわらず、朝鮮族の人々はその変容に対する意識はあまりなく、自分たちを朝鮮半島における伝統的な文化を所有している存在として認識している。したがって、朝鮮族の人々にとっては伝統的文化要素こそが自民族のシンボルであるという意識が強い。例えば、先行研究で多く取り上げる「延辺朝鮮語」に関しても、研究者からみればそれは朝鮮半島の言語が漢文化との接触によって変容したものとされるが、

延辺での調査から見た限りでは、多くの朝鮮族はそれを朝鮮語の方言の違いとしか認識していない。したがって、韓国人との交流のなかでは具体的な側面において異質性が強調されるものの、中国のなかでは朝鮮半島の文化との同一性が強調されている。

すなわち、朝鮮族は地理的に朝鮮半島を離れても、伝統的な文化要素に依拠して自民族を描くようになり、そのような民族像を公的な場所で頻繁に取り上げることで、自らの文化的特徴を強調して来た。その意味でも、中国における朝鮮族の民族文化・民族意識の核にあるのは朝鮮半島での伝統的な文化要素といえる。

Ⅲ 民族関係から見る延辺朝鮮族の自文化意識

以上では延辺朝鮮族が漢民族との長期的にわたる接触と「漢文化」の影響を受けながらも、衣食住や言語などにおいて伝統的な生活を維持し、漢文化とは一線と画してきたことが確認された。では、朝鮮族の人々は日常生活の中でどのような自文化意識を持っていて、どのように維持してきたのだろうか、なぜ漢民族との長期的にわたる接触のなかで、自民族文化を守ることが可能だったのかを漢族との民族関係を軸に検討してみる。

1 延辺地域への漢族の移住

延辺地域において1949年の建国前までは朝鮮族が主な住民であった。延辺の民族構成に一大変化をもたらしたのは、1953年に朝鮮族人口が5%しか占めない敦化市を延辺に編入させたときからである。1960年代には三年自然災害で被害が多かった山東省を中心とした地域からの難民が流入してきた。次の大きな波が押し寄せたのは文化大革命の1969年から1976年の間で、都市の中卒青年たちを農村へ送り、貧農として再教育を受けさせる中国政府の下放政策によるものであった。この「上山下郷」路線に従い、1969年上海から約2000人の青年が琿春と延吉の農村へやってきた（延辺州志：1996, p.79）。また、1980年代後半からの「盲流」や1990年代初期以降の「民工潮」という、内陸部から沿海部への大規模な出稼ぎ移住の流れに乗って、漢族をはじめ大勢の出稼ぎ者が増えた。

他方、朝鮮族は1951年に中国共産党の指示に従い、5740人が抗米援朝戦争に赴き、1959年には朝鮮の経済建設のため1153人が北朝鮮へ戻った。また1960年代の三年自然大災害や文化大革命のとき、何万人もの朝鮮族が朝鮮へ戻った。その後、一時は安定した人口増加を見せたものの、1980年代から始まった国内・国外への移動と、低い出生率によって朝鮮族の人口比率はますます低くなっている。

2 漢族との関係と自文化意識

2-1 民族関係

1998年、延辺州党委書記王裕林（漢族）は「全州民族事業大会」で、「延辺ではさまざまな形式と規模で民族団結友誼活動を行っている。現在300箇所の学校と学級が民族団結友誼学校または、民族団結友誼学級姉妹決議を結び、1万余りの学生、4500戸の家族、400箇所の企業、700箇所の村、300箇所の个体戸（自営業）が民族団結友誼関係を結んだ」と民族事業の成果を強調した。また、「中国延辺朝鮮族自治州民族関係の形成と発展」の中で、梁玉今は「民族自治州設立50周年以来、民族間の摩擦で法的訴訟が一件もなかったことは民族地域で奇跡とも言える」と民族友好関係を強調している（梁玉今：2001, p.146）。

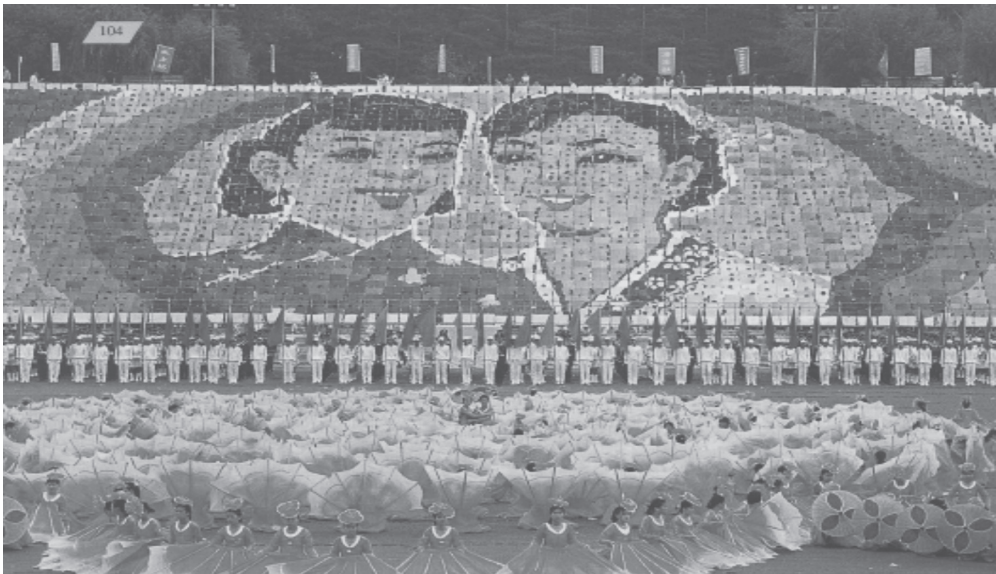


図5 民族団結を強調する演出の一場面

延辺朝鮮族自治州成立50周年記念イベントの一場面、朝鮮族と漢族との民族団結の表像としてバック・グラウンドには朝鮮族女性（右）と漢族女性（左）が描かれ、踊りの中心には漢族女性と朝鮮族女性が抱擁する場面が演出されている。典拠：『走近朝鮮族』（2003）p.104より

このように民族関係に関して延辺ではひたすら「民族団結」の一面を過度に強調する傾向が見られる。その背景には抗日闘争、中国解放闘争で共産党とともに戦い、朝鮮人と中国人の連帯基盤を強化した歴史的事実がある。他方、民族関係という側面から読むと逆説的になるが、同じ地域に住みながらわざわざ民族団結のための活動を行うことは延辺において民族関係が常に意識せざるを得ない問題であったこと、相互の交流の欠如を示唆するものでもある。

中国は主体民族漢族と少数民族との関係に関して、建国後「中華大家族の一員」という民族平等政策を打ち出した。しかし、いずれにしても多数派である漢族との関係が朝鮮族の民族意識の主要で最大の部分であることは確かである。

延辺における朝鮮族と漢族との関係の前提条件として歴史的背景を踏まえると、建国前の漢

族と朝鮮族との関係に関して多くの研究では比較的良好であったことが記述された。そこには、漢族と朝鮮族の移住がほぼ同時期で、先住者とあとからやってきた民族の間に見られる緊張関係がないことや開墾に残された土地が広大で、しかも水田向け低湿地を必要とする朝鮮人と水はけの良い畑作用地を求める漢族とでは、土地をめぐる奪い合うほどの利害関係が当初からなかったこと、稲作技術を有する朝鮮族が貴重な存在であったことがあげられている（鄭雅英：2000, p.48）。ただし、建国前の両民族の関係は対等な関係ではなかったことに留意しなければならない。清朝時代に朝鮮族の人々は「改風易俗」を強制されたり、それにしたがわない者は耕地を没収され、城外に追放されるなどさまざまな制限を受けた。また、両者の関係は漢族地主と朝鮮族小作農という「経済的搾取関係」を主としたものであった。このような生活環境のなかで、彼らが漢族に対して恐怖感を抱いたことは想像に難くない（中国朝鮮族青年学会編：1997）。

満州時代には日本の朝鮮植民地化と中国侵略政策によって朝鮮族と漢族との関係はさらに悪化した。1910年「日韓合併」後、日本は朝鮮人を保護するという口実で満州で朝鮮族が部落を作ったところには領事館や警察署を設置した。そのため中国人は当初朝鮮族を日本の中国侵略の手先と見ていた。日本はまた「朝鮮人開拓団の流入と開拓村の設置」⁴政策を打ち出し、既住の中国人・朝鮮人農民の土地を無理やり取り上げ、朝鮮開拓民をそこに入植させ、水田を開発させた。そのため漢族の人々は自分たちの土地が日本人から朝鮮族に渡ったものと認識した。その後日本民族を頂点とする露骨な民族等級制度⁵が実施された。このような民族乖離政策は漢族と朝鮮族の関係を悪化させたばかりではなく、一般民衆の意識に一定の民族差別観をもたらした。つまり、漢族から見れば一段上に置かれた朝鮮族は日本の「走狗」で、朝鮮族から見れば漢族は自分たちより下という、互いに対する差別意識を持つ構図があった。

1949年の建国後中国の民族政策は大きく変わった。中国共産党は「搾取階級の消滅」を進め、民族平等団結政策を打ち出した。民族平等とは、各民族が社会生活で、同等の地位や権利、利益を得るもので、民族団結とは、社会生活や相互交流の中で見られる友好、親睦、協調を示すものであった。民族間の平等・団結・友好合作の気風を作る必要性から、州政府は1950年代から「民族工作科」を設置し、党の民族政策宣伝に努める一方、農村部にも「民族工作科」を設置し、民族団結を促した。1953年には「民族団結模範大会」を開催し、県、市、州レベルで、漢族農民に水田農作技術を伝授した朝鮮族農民や村、朝鮮族農民に野菜栽培技術を伝授した漢族農民が民族団結模範と選出され、表彰された。そして毎年9月を『民族団結宣伝月』と設定し、朝鮮族は漢語を、漢族は朝鮮語を習う民族団結活動を行った。この活動はいまも一部続いており、朝鮮族自治州は1994年、1999年全国で全国民族団結模範自治州」となった。

4 1942年までに間島地域には朝鮮人開拓部落は86箇所が作られ、5114戸29741人が入植された。

5 すなわち、日本人は「一等国民」、朝鮮人は「二等国民」、漢族とは「三等国民」といった図式である。このような階級図式によって、労働現場で民族差別賃金構造、食料の配給制度が生まれたが、配給の種類や質は日本人―朝鮮人―中国人の順で、しかも一般に中国人は配給対象に含まれなかった。

しかし、漢族との関係は概して良好とは言え、今も互いに対する差別語が普通に使われており、多くの朝鮮族の中には漢族に対する恐怖感や差別意識が強く残っている。延辺地域における両民族のこのような関係の大きな要因として両者の交流の欠如があげられる。

1949年の建国当時、延辺に残った100万人近くの朝鮮族のうち、約80%の人が農業に従事し、漢族もほぼ農業に従事していた。農村部では社会主義の原理に基づいた「人民公社」制度が実施され、漢族の大量移住時代においてもかつての自然村を解体するような動きはなく、朝鮮族村と漢族村は別々であり、生活場所は異なっていた。生業においては朝鮮族が主に水田耕作、漢族は畑仕事と野菜栽培に従事し、自給自足の生活が続くなか、両方が接触する機会も少なかった。そのため農村部では漢文化の影響を殆ど受けず、従来の生活文化が維持され、漢族とのコミュニケーションに必要な漢語も殆どの人は話せない状況であった。このような農業を主軸とする社会構造は、文化大革命終結時までほぼ維持された。都市部においても朝鮮族と漢族の間に保持されていた「住み分け」を基本とする関係が変容しつつも、漢族と朝鮮族が全面的に混在する居住状況が出現していたわけではなく、交流は少なかった。

また朝鮮族子弟の92%以上が民族学校に通い、そこでは朝鮮語が授業語として使われるため、言語的に同化されないだけでなく、漢族との接触も限られていた。すなわち、農村部は勿論のこと都市部においても、生活レベルで漢語と朝鮮語のバイリンガル化にまでいたっていない。

つまり、歴史的要因や住居、また政治運動などさまざまな要因によって、延辺ではいまだに朝鮮族と漢族との交流が密接とはいえない。漢族に対する意識には世代差が大きく、特に年配の人の中には中国共産党の恩恵を受けたという認識と民族圧迫を受けた歴史記憶が交差している。若い世代は言葉も通じており、比較的平和に暮らしているに見える。ただし、言葉が通じていても両者のコミュニケーションがうまくいくとは限らない。延辺でいまだに朝鮮族と漢族の結婚が極めて少ないことも両民族関係の一端を示している⁶。

2-2 朝鮮族の生活に見られる民族観

中国における朝鮮族の民族意識は、当然、他民族との対比の上で成立する意識である。ここでは、朝鮮族と漢族との関係が朝鮮族の自文化意識にどのような影響を与えるのかを朝鮮族の日常生活から見ていく。

延辺朝鮮族は言語、服装、家屋など衣食住や生活様式、儀礼的な慣習などにおいて伝統的な生活に拘る。家庭では朝鮮語を使うのが当たり前であり、結婚・還暦・子供の一歳誕生日のお祝いなどの慣習は、世代の交代や中国の政策の変化に伴って簡略化されたものの絶たれること

6 馬戎は<中国各民族之間的族際通婚>において中国少数民族を他民族との通婚状況から①「他民族との通婚を制限し、民族内結婚を実行する民族」②「一定の条件で他民族と通婚し、民族内結婚が厳格に実行されない民族」③他民族との結婚を制限しない民族」と、三つのパターンに分類している。朝鮮族はその①の「他民族との結婚が制限される民族」のパターンに属する（馬戎：2001，p.174）。中国朝鮮族の中でも延辺地域の朝鮮族と漢族との結婚率はさらに低い。高崎宗司の調査でも延辺地域の朝鮮族と漢族との通婚率は1.8%との結果が挙げられている（高崎：1996，p.49）。

はなく、漢族の習慣とは明らかに違う形式で進められてきた。また朝鮮族の日常生活にはさまざまな文脈に「民族」が絡んでおり、彼らが日常生活のなかで常に漢族と自分たちを区分してきた痕跡が残っている。例えばもっとも日常的な食文化をみても、同じ自然環境で生活しながら、朝鮮族と漢族の栽培している野菜の品種が異なるが、それを「漢族とうがらし」「朝鮮とうがらし」、「漢族キュウリ」「朝鮮キュウリ」などと分別する。いまは食文化の境界線を越えて互いに相手のものを食べながらもこの呼び方はそのまま残っている。

延辺地域において朝鮮族の民族的な生活を可能にした要因は、直接的には漢族との交流が少なかったことと間接的には自民族文化に対して誇りを持ってきたことである。朴慶輝は朝鮮族の良い習慣として「知識・知識人を敬い、子供の教育に熱心である風習、道徳と礼儀を重んじる風習、きれい好きで衛生に格別に気をつける風習」とまとめている（金東和：1994, pp.234～270）。そこには、中国へ移住してから貧しい生活の中でも、民族教育を発展させ、中国で教育水準がもっとも高い民族としての地位を固めたことと朝鮮半島における儒教的行動様式が規範として厳しく守られてきた誇りが窺える。

延辺朝鮮族は自民族を賛美したり、自慢したり、相手を貶めようとするときには、必ず「東方礼儀の国」「礼儀正しい民族」という朝鮮半島における儒教的な文化要素を取り上げている。延辺で朝鮮族の人に「どんなところで民族の誇りを感じますか」と聞くと「朝鮮族は教育水準が高く、礼儀正しく、きれい好きだから」とのほぼ同じ答えが返ってくる。このような朝鮮族の自ら作り上げた「教育熱心、礼儀正しさ」というイメージは民族関係という側面から言うと明らかに地元漢族と対置して形成された自民族のイメージである。

ただし、延辺朝鮮族が自民族文化を賛美したり、文化的アイデンティティを強調するようになったのは建国後だといえる。建国前までは、延辺地域は人口的からすると朝鮮族が主流であり、すべての生活や習慣が日常になっている営みのなかでは、他文化に対する優越意識をもっていたとはいえない。建国後中国共産党の少数民族文化尊重の政策によって延辺では民族文化機関や民族学校、民族メディアが完備されたが、民族文化機関の発達は朝鮮族の自民族文化に対する意識の形成に大きな役割を果たした。また、延辺では1949年にすでに朝鮮族を対象とした総合大学「延辺大学」が設立され、さまざまな分野の人材が育てられ、教育や文化、衛生などの事業が朝鮮族自身によって担われた。彼らは数の上でも優越していたし、教育・文化など分野で優位な立場に置かれていたため、自分たちの民族文化を理想化し、延辺社会の規範として保持してきた⁷。

そして、延辺朝鮮族の文化的アイデンティティを強化したもう一つの側面としては、建国後の政治的な要因も影響している。建国後中国社会への適応にあたり、民族指導者たちは常に「優

7 建国後中国政府は少数民族地域における政治、経済、社会、文化、医療、衛生などの各種の社会事業を建設する目的のために多くの人材を辺境地域に送り込んだ。したがって一般に中国東南部などの少数民族の文明化は漢族によってもたらされたものとして、両者の関係はいわゆる「文明化された漢族」と「文明化されてない少数民族」という関係であった（長谷川：2001, p.245）。

秀な民族として」「全国の前頭に立つべき」とのスローガンを掲げ、朝鮮族の中国への政治的忠誠心を促してきた。そこには主体民族である漢族よりもっと「優秀な民族」を目指すとの意味合いも内包しており、漢族に対するある種の対抗意識として捉えることも可能である。そのためにも、朝鮮族の人たちは他民族と対置した自民族のイメージを作る必要があり、他民族とははっきりと対照性をもつ朝鮮半島における伝統的文化要素を取り上げて、中国における自民族の優秀性を「表徴」してきたといえる。

このような自文化意識は場合によっては他民族の文化を否定しているかのような印象さえ与える。2005年延辺で行われた調査では「あなたは漢族の習慣や伝統文化に興味を持ちますか」という質問に対して、197人のうち「全く関心がない」が95人（48%）、「あまり関心がない」が87人（44%）、「ある程度関心がある」が11人（5.5%）、「非常に関心がある」が3人（1.5%）との結果もこのような状況を裏付ける。勿論延辺でも居住地域によって、また民族教育を受けた人と受けなかった人の漢族との交流の状況は異なり、漢文化に対する理解も異なる。小学校から漢族学校に通っていた朝鮮族A（男、38才）さんは次のように語る。

「漢族が少ない延吉や龍井地域の朝鮮族の中には漢族の友人もいなく、漢族の生活習慣も知らないにも関わらず、とにかく漢族の生活習慣を否定し、自分たちが漢族より優秀だと思い込んでいる人が少なくない。当然漢族から見ればお酒が好きで、大男子主義（男尊女卑の意味）である朝鮮族男性は暴力的に映っている。延辺朝鮮族はずっと自民族がもっとも優秀だといい続け、他民族を理解しようとししない。」

Aさんの語りからは延辺における朝鮮族と漢族との関係、延辺朝鮮族自民族文化に対する優越意識の一側面が窺える。ただし、ここで言うっておかねばならないのは1980年代以前までテレビなどが普及しておらず、延辺朝鮮族が認識している漢文化とは主に延辺で接する漢族の生活習慣であったことである。延辺における漢族の属性からすると、彼らの殆どは生活に困窮した山東・河北などからの流民であって規範的な生活様式とは程遠いものであった。漢文化に対するこのような先入観のもと、朝鮮族の自民族文化に対する価値観が形成されたとも言えるが、このような価値観は漢族の大量移住、拡散と漢族文化の伝播によって、ある意味で漢族中心的な社会になりつつある中でも、衣食住、年間行事などにおいて民族的区別が一目瞭然で、文化的差異の維持を可能したと言える。

3 地域社会と朝鮮族伝統文化

以上、延辺地域において朝鮮族の人々がなぜ民族的な生活様式を維持することが可能であったかを、漢族との関係から考察してきた。そこから延辺地域で朝鮮族が伝統的な生活を営むことが可能であったのは、漢族との交流が少なく、自民族の文化に対して優越意識を持ってきた要因が大きいことがわかる。さらに、1992年の中韓国交樹立以降の韓国の文化やものの急激な流入による、朝鮮族の経済生活の変化は延辺における文化のあり方に大きく関係している。

延辺の州府である延吉市には韓国式の看板やものが溢れ、テレビ、ラジオでは韓国ドラマや音楽がながれている。また、韓国との貿易、韓国人向けの観光業やサービス業などで主導的役割を果たしているのは朝鮮族であり、したがって彼等の生活様式のさまざまなところに韓国文化が浸透している。経済生活を見ても多くの朝鮮族が韓国に出稼ぎに行き、韓国からの送金などによって経済的に延辺の漢族より優位に立っている。

このような地域的な性格は両民族の接し方や文化にも影響を与え、新たな社会文化現象が出現しつつある。その特徴の一つは、漢族の人口が増えることによって、漢語を話さないと生活に不便が多い地域でありながら、それと対照的に地域における韓国文化要素の影響が強く、漢族の人たちも表向きでは朝鮮族の文化を積極的に受け入れていることである。

2006年8月28日、延辺朝鮮族自治州延吉で開かれた「中国延辺朝鮮族民俗文化観光博覧会」の伝統婚礼セレモニーでは、8組のうち5組は漢族男女であった。また、大きなホテルなどでは漢族の女性が朝鮮族チマ・チョゴリを身に着け、「アンニョンハセヨ」（こんちは）など朝鮮語で挨拶をするのが普通に見られる光景である。これは単なる朝鮮語による挨拶語以上の、延辺における朝鮮語の主体性を表す象徴的な言葉として意識的に使われているに違いない。商店街などでは漢族が経営している店でも、韓国語の歌が流れている。

すなわち、延辺の漢族の生活文化にも朝鮮族文化が入りこみつつある。それによっていまは延辺の漢族の中には自分たちを他地域からやってきた漢族出稼ぎ者や他の地域の漢族とは異なる存在と位置づける人もいる。現地調査で、延辺出身の漢族のタクシー運転手Bさん(20代、男)と交わした会話からも確認できた。

「漢族の男性は家庭で家事も良くやってくれますね。」と私が話しかけると彼は「いえ、いえ、私はしません。内は女房が全部やります」と否定しながら、「延辺の漢族は朝鮮族と変わらないのです。食べ物も習慣も似てきたし、友人も殆ど朝鮮族だからね」と付け加える。そして、最近の出稼ぎ者に対しては「出身地も違うし、習慣も全く違う」と自分たちとの違いを強調した。

これは朝鮮族に対するBさん個人的なイメージでもあるが、彼の話のなかで、他地域出身の漢族出稼ぎ者と自分たちを分類する際、自分たちの文化に朝鮮族の文化的要素が強くなったことが強調されている点は興味深い。彼は朝鮮族の食文化を取り入れ、また、延辺朝鮮族男性に対して批判的要素であった家庭内での男性の権威という儒教的な行動様式を取り入れて、出稼ぎ労働者と自分を区別している。

勿論、文化接触という観点からいうと異なる民族が同じ地域に住む環境の中では互いの文化に影響を与え文化に変化が起こることは充分ありうることであるが、それがマジョリティとマイノリティの関係となると、マジョリティの文化が優位でマイノリティ文化が同化されていくパターンが通常では多い。従来、漢族は主体民族として延辺での定着においても、朝鮮族に依存・従属する必要もなかったし、漢文化優位の中国社会で、朝鮮族の言語や習慣などを理解する必要もなかった。会議などでは漢族が一人でもいれば、漢語で進行されるため、何十年延辺

で生活しても朝鮮語を覚えないのが一般的であった。しかし、今では若者の中には朝鮮語を話そうとしている人も、子供を朝鮮族学校に通わせる人も増えてきた。今日におけるこうした現象は従来の関係とは異なる、市場経済の中で形成された両民族の関係を特徴づける新しい要素になりつつあることを表している。

Ⅳ 近年における民族文化・歴史の構築

1 民族文化強調の背景

1-1 漢族の大量移住

延辺における朝鮮族の地域間、民族間関係の様相は1980年代の改革開放と市場経済を契機に大きな変化が生じた。1980年以降国内の自由移動が可能になると、地域による経済的格差は多くの朝鮮族をして北京や大連、青島など沿海都市や海外への移動へと促進させた。さらに1992年中韓国交樹立に伴い大勢の朝鮮族が韓国への出稼ぎに出かけたため、朝鮮族社会の空洞化が進んでいる。他方、延辺地域には韓国企業が進出し、韓国人観光客が増えてきた。また朝鮮族の移動先から送られる送金のほか、稼いだお金を元手にして大小の事業を興す事業者が出現し、延辺朝鮮族の経済生活を活性化させた。延辺地域の朝鮮族の空洞化現象と地域経済活性化は漢族を中心とする出稼ぎ者を延辺へと呼び込む一つの契機となった。

特に、1980年代後半から始まった建設ラッシュによる労働力の大量需要によって、山東省、河北省などから多くの出稼ぎ労働者がやってきた。最初の頃は単身で来て、冬期建設工事の仕事がないときにはふるさとへ戻るのが一般的であった。しかし、延辺での生活に慣れてくると家族や親族を呼び寄せ、延辺での生活基盤を作り始めた。出稼ぎ者人口に関する正確な数字は統計資料にはあらわれていないが、出稼ぎ者が多く住んでいる地域である延吉市延南街は2008年度の調査によると、全区域の人口は4万6千人（漢族が2万8954人）のうち、臨時戸籍が5千236人で、臨時戸籍の多くが漢族出稼ぎ者であると推測される⁸。出稼ぎ者たちは主に建設労働、小売業、タクシー、修理、清掃、三輪車引きなどの労働に従事している。

農村部においても漢族出稼ぎ者の定住化が進んでいる。そこには、朝鮮族農民から漢族出稼ぎ者に対する土地の貸借や土地使用権の譲渡、不動産の取引が行なわれていることと大いに関係がある。1992年前後から朝鮮族の農村離れが進んだ。農村部の土地の値段と不動産は一般的に安い状況で、韓国や大都会に行けば大金を稼げられるという夢から、安い値段で簡単に売却されるケースが多い。こうして朝鮮族の土地や家屋が安い値段で外来の出稼ぎ農民（主に漢族）に提供されており、すでに漢族の所有になっているところも多い。満州時代韓国慶尚南道からの集団移住村として有名である安図県長興郷新屯村はもともと76戸の朝鮮族村であったが、

8 中国国内移動において移動者は移住先での正規の戸籍の有無を基準として「移住人口」と「流動人口」に分かれる。前者は戸籍の移動を伴った移動で、後者は戸籍を原籍地に残したままでの移動をさす。農村戸籍と都市戸籍を区別する戸籍管理制度は、1950年代から厳格に執行されていた。臨時的な戸籍（暫住戸籍）の有無から、「暫住人口」と「非正規暫住人口」に区分される。

2006年調査時には朝鮮族が13戸しか残ってなかった。この村は伝統的な農楽舞で有名な村で延辺朝鮮族民俗文化村にまで指定されたものの、2004年からは多くの人が村を離れたため、このような民俗活動も中断されている。水田農業を知らなかった漢族もいまは朝鮮族が残した水田で水田農業に従事し、朝鮮族式農家に住んでおり、漢族の出稼ぎ者たちは延辺で着実に自分たちの生活基盤を作り上げている。

1-2 先住者としての意識

延辺朝鮮族は未開拓地を朝鮮族の人々が開拓したという歴史認識から、この地域において先住者としての意識が強い。「我々が愛する故郷」「われわれの祖先が葬られている土地」などの表現からも窺えるように、朝鮮半島からの外来者であるはずの朝鮮族の人々が、世代を重ねてゆくに連れて、この土地を祖先の土地と認識し、いまは自分たちを中国へ帰属するものと認識するに至っている。他方、漢族から見れば、あとからこの地域やってきて「中国人、中国の領土」という概念が一般的である。これからも図們江の開発⁹に伴い、さらに多くの人が集まってくると予測されているが、朝鮮族人口の急激な減少と漢族の増加は民族自治州としての存在を根幹的に揺るがす事態である。そのうえ、都市化が進むにつれ、住宅様式等からでは朝鮮族と漢族の区別がつかなくなり、さらに朝鮮語さえその重要性が軽視されるようになってきた。

延辺朝鮮族には、宗教のような民族のアイデンティティの維持にとって強固たるものが存在しない。世界的にみて古くからの民族がある地域から消えていく現象は、頻繁に起きている。朝鮮族指導者や知識人たちは民族自治州としての存続の危機、民族的なものが失われつつある現実への不安から、地域へのアイデンティティや民族意識を高めるためのさまざまな民族文化運動を提案した。そのなかには、民族的なイベントの開催、民俗村の建設、民族文化機関の設置、民族歴史の再構築などの実践が含まれている。このような実践は知識人だけではなく、自治州政府、大衆レベルでも進展を見せている。では、彼等のその実践で何を実現し、どのように中国での自分たちの基盤を確固たるものにしようとしているのであろうか。

2 観光地における伝統の「復元」

延辺における伝統文化の復元は、主に民俗村、民俗博物館の建設、民俗文化祭など儀礼空間における歴史と文化の再現を通じて実現されている。朝鮮族の民俗文化の復元は比較的早い段階で始まった。1980年代から中国政府の少数民族文化に対する見直しが説かれ、文化財の保護が唱えられた。延辺では1985年に「朝鮮族民俗学会」が設立され、民俗調査、民俗資料の整理、文物の発掘などが行なわれた。1992年には延吉市帽兒山麓に民俗村が建設された。そこでは庶民の伝統的家屋、伝統的食文化、伝統的民俗遊びが再現された。民俗村で再現された民俗文化はある意味朝鮮族の足跡に限った庶民文化であって、朝鮮族に懐かしい郷愁を与える場と

9 1996年、中国政府は延辺地域を金三角州としてロシア、北朝鮮、さらには日本海を挟み日本とも接している状況から、国境を跨る経済圏の創出にきわめて重要な地域と位置づけ、積極的な態度を打ち出した。

して、大衆レベルの関心を喚起する契機となった。

このような民俗活動は最近新たな展開を見せている。それは何より朝鮮族の文化的パフォーマンスとしての民俗博覧会の開催と朝鮮族民俗文化のブランド化への志向に現れているが、朝鮮族民俗文化のブランド化のために利用されるのは、朝鮮族の伝統的な庶民文化ではなく、朝鮮半島における両班文化を規範とした民俗文化である。1995年に国家観光局、州政府の主催で「中国延辺朝鮮族民俗観光活動」を開催し、2002年9月3日延辺朝鮮族自治州成立50周年の祝祭では、中国国内や海外諸国からの招待客に中国少数民族政策の下で発展してきた自治州の歩みとして、盛大な「民俗文化観光」が披露され、朝鮮族の民俗文化が大きくアピールされた。2006年からは毎年延吉市新聞出版機関、観光局、宣伝部、民族宗教局などの具体的な責任部門の主催で「延辺朝鮮族民俗文化観光博覧会」が一ヶ月半に渡って開催される。「朝鮮族の民俗文化を発掘、展示、継承、発揚し、延辺の文化品位を高める」主旨で開催された博覧会では、朝鮮族移民の歴史を100年の移民史として記載しながら、「朝鮮半島で数千年の歴史をもつわれわれ朝鮮民族の美しい伝統文化」として、朝鮮半島における両班家庭の規範的な礼儀文化が再現されたり、伝統的な婚礼、還暦のセレモニー、伝統的な料理やスポーツ、衣装、舞踊などが提示され、人々の関心をこうした朝鮮民族の伝統文化へと導いている。

このような規範的な伝統文化の再現はパフォーマンスだけではなく、朝鮮族の生活にも浸透を見せ実体化されていくのである。2006年12月22日には、朝鮮族の風俗と正しい礼儀文化の伝播を主旨として「延辺民族伝統礼節文化院」が設立されるが、そこでは還暦宴、結婚式、初誕生日宴などがすべて伝統礼式によって行なわれると同時に、民俗教育の一環として小中学校の学生たちにも朗読、朝鮮族の礼儀文化を教えている。延辺大学でも朝鮮族の伝統文化要素を朝鮮族の文化遺産として残すこと、子供の「民族教育の基地として、民族精神を高揚し育てる重要な陣地として生まれ変わる」ことを目指して「民俗博物館」を開設している（延辺大学博物館建設に関するパンフレットより）。

延辺における「伝統的民族世界」の再現は、民俗文化による再現に止まらず、「朝鮮族自治州」として街全体に朝鮮族の特徴を生かすための動きにも発展しつつある。延吉市の都市建設プロジェクトで金振吉州長（2006年当時、朝鮮族）は民族風格をより生かし、民族色の濃い建築物を作ることによって延吉市に民族の形を受け継がせるよう指示した¹⁰。

10 2005年6月18日「アリランジャーナル」より。



図6 伝統的結婚式の演出

2006年延辺朝鮮族自治州民俗博覧会で再現される朝鮮半島における規範化された伝統婚礼。典拠：延辺朝鮮族自治州ホームページより。

このように延辺地域における民俗文化の復元はますます本格化している。民俗村の建設と民俗文化祭の開催、民俗博物館の建設と朝鮮民族の伝統的様式を濃厚に残す家屋建築の普及によって、いままで伝えられなかった伝統的な生活が、一種の観光資源として公開され、「一つの伝統的な世界」を作り出している。勿論、延辺における伝統文化の復元は、州政府の観光政策、観光局の積極的な後押しが大きく、延辺における観光開発の一つの對外宣伝窓口として、観光業発展を導く商業主義的な要因が大きい。しかしその一方で、延辺における朝鮮族の伝統文化空間構築へのかかわり、国内・国外に向けて延辺朝鮮族の民俗文化を大きくアピールする背景には、延辺地域における朝鮮族の伝統文化を確立する動きとも受け取れるが、急増する漢族移住者に対するこの地域の開拓者としてのある種の強いメッセージを内包するものであった可能性もある。

伝統文化の復元を文化的側面から見ると、朝鮮族が自分たちの民俗文化に対する再認識・再修正とも捉えられる。朝鮮族の祖先のほとんどは朝鮮半島において庶民出身で、中国へ移住してきてからもこのような庶民文化が自発的な形で継承されてきた。近年におけるこのような民俗文化の再構築は、朝鮮族の庶民文化の足跡を辿るだけではなく、朝鮮半島における両班文化を利用して自民族の文化イメージの洗練化を図り、「朝鮮族の美しい姿を世の中に広く知らせる」という、他民族の視線・評価を意識するなかで民族意識を強めていくためのものである。このように近年における朝鮮族の民族意識の高揚、延辺朝鮮族社会維持に最強の手段として使われるのはほかでもなく、朝鮮半島における伝統的な文化要素である。

3 朝鮮族移民史の構築

朝鮮族の移民史を明らかにすることは過去の朝鮮半島との連続性を保証するものである。そ

のつながり方は、家族の移民史といった世代レベルの来歴と、もっとも一般的な朝鮮族の移民史という二つのレベルに分けて考えることができる。しかし、延辺朝鮮族の場合、移民史に対する認識や関心が薄く、家族の移民史さえ知らない人が多い¹¹。

いままで朝鮮族の民族教育において朝鮮族移民史が取り上げられることはなく、多くは家族の口頭伝承レベルにとどまっているが、その家族の移民史さえも正確に伝えられていくとは限らない。朝鮮族の中国への移民といっても世代の深さは古くても4、5代程度で、系譜の深度が根本的に浅いにもかかわらず、族譜を持たないため、4、5世代前の祖先の名を言える者は少なく、自分の祖先をさかのぼることのできる世代は3世程度にとどまる。一般家庭において家族の移民の歴史は年長者から伝えられたりすることもあるが、家族が関心や興味を示さない限り、祖先の移民史は勿論、祖先の名さえ語り継がれることもなく忘れ去られる。つまり、民族の移民の記憶が確実に部分的に失われていくのである。

こうしたなかで朝鮮族の移民史の探求は1980年代から本格化した。多くの知識人たちは自民族の歴史を学ぶ必要性を唱え、朝鮮族の移民史を自分たちの手で構築し、自民族の正しい歴史観を子孫に受け継がせるためには、教育分野、歴史研究分野、さらに政府次元で推進しなければならぬとの見解を示していた。そこで、朝鮮族移民史に関するテキストが作成され、一部においては民族教育の一環として学校教育に導入する試みもあった¹²。

朝鮮族の移民史構築は1990年代から新たな展開を見せたが、それは研究書だけではなく、一般読者・青少年向けの朝鮮族移民史に関する小説や文学作品が多数出版されていることである。なかでも朝鮮族英雄の物語が重要な部分を占められ、中国革命における朝鮮族の貢献が強調されている¹³。これは中国で近年愛国教育の一環として行なわれる反日教育のさなかでの、中国人と共に日本と戦った歴史の確認であるが、この土地で戦った自民族英雄たちの存在を具体的に描きだすことで、自民族の偉人を再確認し、偉人と朝鮮族の歴史を同一化する傾向が明らかである。

そして、有志人たちが主体になって朝鮮族の移住と定着に関わる伝説・民族・移民史の収集、整理を行なっているが、それによって「一松亭」叢書など延辺の郷土の歴史と関係がある書籍

11 2005年の延辺地域で197人を対象として行われたアンケート調査で、「朝鮮半島における祖先の本籍を知っているのか」という質問に対して、「知っている」と答えた人が75人（38%）、「知らない」と答えた人が122人（62%）であった。「知っている」と答えた人の中には、本籍地の概念さえを知らず「朝鮮」「韓国」と答えた人が43人、また自分の移民始祖、つまり一世が定住した中国の地名を書いた人が28人であった。197人のうち本籍地をはっきり書いた人がわずか4人で、いずれも移民二世であった。また、「移民何代目」という質問には、「知らない」と答えた人が149人（76%）で、「知っている」と答えた人が48人（24%）で、いずれも3世以内の人にとどまる。

12 延辺では1998年から中学校の歴史参考書として『中国朝鮮族歴史常識』（朝鮮語、延辺人民出版社）が使われる。

13 1999年以降に発行された英雄関連の書籍だけを取り上げてみても、『東北地域朝鮮人抗日烈士資料集』1～10巻（黒龍江朝鮮民族出版社、2003）、『不滅の足跡』（民族出版社、2005）、『われわれギョレの将軍』（民族出版社、2005）、『朝鮮義勇軍最後の分大将金学哲』1、2巻（延辺人民出版社、2002）、『156師実戦録』（延辺教育出版社、2005）、『延辺人民抗日闘争史』（民族出版社、1999）、『延辺とともに60歳月』（民族出版社、2006）など多数ある。

が多数出版されている。龍井市旅游指南として発行される『悠久歴史的海蘭江畔1』『悠久歴史の明東村2』『悠久歴史の閭門江畔3』『悠久歴史の九水河畔4』から具体的その内容を見ると、歴史遺跡・風景区が62箇所、有志人士が58人、延辺地域にまつわる伝説が76編紹介されており、民族英雄だけではなく、延辺の郷土を中心とした歴史や史跡、伝説が系列に書き上げられている。作者である百民声は序章で次のように綴った。

「我々が生活しているこの土地は、我々の祖先が開拓し、守り、建設した土地である…この土地の一本に樹にも、一つの石にも、一粒の土にも我々祖先の血と涙が滲んでいる…我々はこの土地を世々代々守って行きながら、青少年たちに民族の根を教えなければならない…輝かしいわが民族の歴史は愛国教育、革命伝統教養にもっともすばらしい教科書である。」

延辺では民族英雄の宣伝とともに政府レベルの支援を得て、これらの偉人の足跡を辿って、史跡の発掘・整理・修繕事業が急がれている。龍井市は朝鮮族の文化・教育・反日運動の中心地である。そこで最初に民族教育を行なった「瑞甸書塾」や著名な反日詩人尹東柱が生まれた生家や大成中学校、民族独立運動家安重根義士訓練遺跡地などなどさまざまな史跡の発掘に力を入れたり、偉人たちの銅像を建てたりしている。

民族歴史の構築には、民間で伝わる伝説を文集にしたものも多く登場している。上に紹介した「龍井市旅行指南」にも76編と多くの紙面を割いている。そもそも朝鮮族の人達が移住先で荒地を開発し、定着するまでには計り知れない苦労があったに違いない。このような歴史を鮮明に示すように延辺の殆どの地方名も山、川の名称も朝鮮族によって命名されたものが多い。そこには異国での生活での伝説も沢山残されている。延辺朝鮮族のような無神論社会では、現在祖霊にまつわる儀式は実際におこなわれていない。しかし、いまは民俗学者たちが民間の長老を訪れ、これらの伝説を収集する作業を行なっている。朝鮮族の移住史とも深いつながりのある「伝説」の収集・整理は朝鮮民族の伝統の復元に一定の力を貸してくれるだけではなく、この土地における朝鮮族との系譜の確認が行われていることと捉えられる。また、朝鮮族の言語や音楽、舞踊、歴史、体育、教育などさまざまな分野にわたって文化研究所が設立され、中国へ移住してからの朝鮮族の教育、文学、民間歌謡、踊り、絵、演劇などの収集・整理が行われ、確実に中国における「朝鮮族」としての独自の文化史を体系化し、確立していくのである。

自民族の歴史を記録し、それを知識として世間に伝授させるのは画期的なことでもある。しかし、注目しなければならないのは、朝鮮族のルーツの確認には朝鮮半島における檀君による建国神話やかつては朝鮮半島の国教として国の礼制を整えた「朱子学」など朝鮮民族の歴史も大変重要であるが、なぜかこのような朝鮮半島における朝鮮民族に関する歴史的なものは殆ど見られず、もっぱら中国への移住後の移民史や物語が主体になっている点である。そこには、延辺への郷土愛と地域へのアイデンティティを高揚させる目的があるとはいえ、朝鮮半島の朝鮮・韓国人との一体感を断ち切って、中国における自分たちの新たな歴史の始まりとして、移民一世たちを自分たちの始祖と想定し、自分たちのルーツを延辺地域に求める新たな歴史観の

生まれることを期待していると思われる。

おわりに

かつて延辺地域は漢族が少なく、朝鮮族の文化が維持されていたが、近年は人口の比率が逆転しつつある。朝鮮族民族文化に関する先行研究では、漢文化による民族文化の変容を強調されるのに対し、本稿では言語、食生活、住居などの側面において伝統的な朝鮮族文化が基本的に守られてきたことに注目した。主に、民族境界維持という視点から、朝鮮族の人々が朝鮮半島における伝統的文化要素を核にした、漢文化と対置された自民族の文化を描き出し、他民族との差異化を図り、自らのアイデンティティを維持してきたことを中心に論じた。

延辺朝鮮族が自分たちの伝統的な生活にこだわる背景として、建国前、建国後とも日常生活における漢族との交流が少なく、また日本の支配時代には朝鮮人を漢人の上に位置づける政策が採られたため、そこで培われた優越意識が解放後も残存しており、そのため朝鮮族において漢族との文化的差異が強く意識されていることなどが明らかになった。

さらに、近年における朝鮮族の朝鮮半島における伝統文化への復帰の傾向から、朝鮮族の新たな文化傾向についても考察した。中国において朝鮮族社会は孤立した社会状況ではないため、漢文化の受容という道を歩みながら、新しい文化かつ社会的関係を築いている。その実践の一つとして、1980年代からの民族の知識人や民族幹部によって発動された自民族の文化や歴史の構築である。そのプロセスにおいて朝鮮半島における朝鮮民族の文化的あり方を基礎にしつつ、朝鮮族の民族意識の基礎となる、「朝鮮族」といった枠組に沿って、民俗文化をはじめとした伝統文化を実態化し、それを国内外に発信したり、また民族の移民史を構築したり、音楽や文学などにおける朝鮮族独自文化の体系化・充実化を積極的に進行させている。

これは自分たちの文化に関しては朝鮮半島における「伝統的文化」との繋がりが常に強調されている一方、歴史に関しては朝鮮半島とは切り離し、移住以後に自分たちの歴史の出発点を求めていることである。すなわち、朝鮮半島における「伝統的文化」要素を核にした朝鮮族の文化を保持しつつ、中国社会のなかでその地歩を確かなものに行っているが、これは中国における朝鮮族のエスニック・アイデンティティの形成を理解する上で重要な示唆を与えてくれるものでもある。

【参 考 文 献】

青柳まちこ編・監訳、1996：『「エスニック」とは何か』、新泉社。

伊藤亜人編、1988：『朝鮮を知る事典』、平凡社。

大村益夫、2003：『中国朝鮮族の文学の歴史と展開』、緑蔭書房。

梶田孝道、1996：『国際社会学のパースペクティブ—越境する文化・回帰する文化』、東京大学

出版会.

韓景旭, 2001:『韓国・朝鮮系中国人＝朝鮮族』, 中国書店.

北川隆吉監修・佐藤守弘他編, 1984:『現代社会学辞典』, 有信堂.

高崎宗司, 1996:『中国朝鮮族—歴史・生活・文化・民族教育』, 明石書店.

竹村卓二編, 1994:『儀礼・民族・境界—華南諸民族「漢化」の諸相』, 風響社.

田中明, 2003:『韓国の民族意識と伝統』, 岩波書店.

中国東北部朝鮮族民俗文化調査団, 1999:『中国東北部朝鮮族の民俗文化』, 第一書房.

塚田誠之編, 2003:『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』, 風響社.

鄭雅英, 2000:『中国朝鮮族の民族関係』(現代中国研究叢書27), アジア政経学会.

水上徹夫, 1996:『異文化社会適応の理論』, ハーベスト社.

渥美一弥, 1996:「『伝統文化』を『名乗る』こと」『民族学研究』61 / 1, pp.105 ~ 121.

黄有福, 2006:「東アジア時代と中国朝鮮族」『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』(中国朝鮮族研究会), アジア経済文化研究所, pp.57 ~ 71.

太田好信, 1993:「文化の客体化—観光をととした文化とアイデンティティの創造—」『民族学研究』57/4, pp.383 ~ 406.

松本光太郎, 2004:「中国南部少数民族の直面する諸問題—雲南の事例を中心に」『少数民族の文化と社会の動態』(横山慶子編), 国立民族学博物館, pp.105 ~ 116.

長谷川清, 2001:「観光開発と民族社会の変容」『現代中国の民族と経済』(佐々木信彰編), 世界思想社, pp.107 ~ 131.

森山 工, 1992:「民族の場所—中央マダガスカル北東部, シハナカ族における民族意識」『民族学研究』57/2, pp.121 ~ 148.

김강일편, 2001:《중국조선족사회의 문화우세와 발전전략》(金強一編, 『中国朝鮮族社会文化優勢と発展戦略』, 延辺人民出版社.)

김경일, 1994:《중국조선족문화론》(金慶一, 『中国朝鮮族文化論』, 遼寧民族出版社.)

김종국주필, 2000:《중국특색조선족문화연구》(金鐘国主編 『中国特色朝鮮族文化研究』, 遼寧民族出版社.)

김동화편, 1993:《당대중국조선족연구》(金東華編, 『中国朝鮮族研究』, 延辺人民出版社)

연변조선족민속학회편, 1996:《조선족민속연구》(延辺朝鮮族民俗学会編, 『朝鮮族民俗研究』, 延辺大学出版社.)

한상복・권태환, 1993:《중국연변조선족-사회구조와 변화》(韓相福・權泰煥, 『中国延辺朝鮮族—社会構造と変化』, ソウル大学出版部.)

중국조선족청년학회, 1992:《중국조선족이민실록》(中国朝鮮族青年学会, 『中国朝鮮族移民実録』, 延辺人民出版社.)

박승헌, 2001:《두만강지역개발과중국조선족사회》>《중국조선족사회의문화우세와발전전략》

- (朴承憲, 「豆満江地域開発と中国朝鮮族社会」『中国朝鮮族社会の文化優勢と発展戦略』, 延
辺人民出版社, pp.343 ~ 373.)
- 정경암, 1990 : <우리나라 조한이중언어형상의 성격과 발전전망> 《조선학연구》(鄭璟彦,
「中国の朝漢二重言語現象の性格と発展展望」『朝鮮学研究』, 延辺大学出版社, pp.37 ~ 55.)
- 정신철, 2002 : <중국조선족의 인구이동의 현상태> 《중국조선족공동체연구》(鄭信哲,
「中国朝鮮族の人口移動の現状」『中国朝鮮族共同体研究』, 延辺教育出版社.)
- 량옥금, 2001 : <중국연변조선족자치주민족관계의 형성과발전> 《중국조선족사회의 문화우
세와 발전전략》(梁玉今, 「中国延辺朝鮮族自治州民族關係の形成と発展」『中国朝
鮮族社会文化優勢と発展戦略』, 延辺人民出版社, pp144 ~ 152.)
- 金钟国, 1998 : 《党的民族政策与延辺朝鮮族》, 延辺大学出版社.
- 文龙吉主编, 1994 : 《建设中全国模范自治州延辺》, 延辺人民出版社.
- 马戎, 2001 : 《民族与社会发展》, 民族出版社.
- 王晓东编著, 2003 : 《走近朝鮮族》, 延辺人民出版社.
- 延辺朝鮮族自治州概況编写組編, 1984年 : 《延辺朝鮮族自治州概況》, 延辺人民出版社.
- 延辺朝鮮族自治州地方誌編纂委員会編, 1996 : 『延辺朝鮮族自治州誌』(上、下卷), 中華書局.